

「それはよく存じております」

井口昭久

昨年のお年玉賀葉書で当たった記念切手を郵便局から貰って来たばかりだということにもう来年の年賀状の準備をする季節になった。

今年は年賀状の中から当選番号を拾い出すのが簡単だった。当選番号が少なくなったのが原因だと思われる。インターネットの普及で年賀状の売れ行きそのものが落ちてきているそうだ。

「新年あけましておめでとうございます。昨年の先生のあのことは黙っておりますのご安心ください」。私が若い頃に先輩の医師に出した年賀状である。「あのことって何よ？」と奥さんに問い詰められるだろうと予

測して書いた。先輩も「あのことって何だろう？」と思い悩んだそうだ。

同じ頃、夜の街へ出かけて次の日、酔いが覚めぬまま大病院へ出かけると、顔見知り新聞記者と廊下ですれ違った。すれ違いざま「先生、ちよつと」と言つて私を呼び止めた。窓際に私を連れてゆくと、耳元で囁いた。

「先生のあの件は私の胸に収めておくので心配しないでいいですよ」と言つて内容は教えてくれなかった。私は「あの件で何だろう」と思い悩んだ。

人はうしろめたさを抱えて生きている。そ

して最悪の事態を考えるものだ。

数十年前に大学で家宅捜索が行われたことがあった。よほどのことがない限り警察は大学構内には入らないが、その時期は刑事が院内に来るといふ噂があった。

私は当時、煙草を吸っていた。大病院に煙草の自動販売機があった頃のことである。医者が煙草を吸いながら患者を診ていた時代があった。

私は自分の部屋から出てタクシー乗り場に急いでいた。玄関から黒服の集団が病院へ入ってくるころだった。ネクタイを締めたら、6名の男たちは玄関から差し込む夕日を背に隊列を組んで院内を進んでいた。

私は彼らと何気なくすれ違う筈であった。黒い服装の集団の隊列が横一列から縦になった。玄関から吹き込む風にスーツの裾をなびかせて私に向かって来るような気がした。

私は咄嗟に煙草の自動販売機に身を寄せた。顔を隠して彼らをやり過ごそうとした。集団

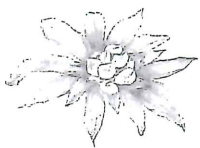
を横目でにらみながら背広から金を出す振りをしていた。

彼らは明らかに私を指していた。

黒の集団は自動販売機を包囲するようにして私を取り囲んだ。

「井口先生！」年配の一人がスーツの内ポケットに手を入れた。そして取り出したのは名刺であった。

「田所製薬の所長ですが、このたび転動してきましたのでその報告に参りました」製薬会社の所長が所員を連れて挨拶に回っていたのだ。「紛らわしいことをしないでよ！俺は何も悪いことはしていない」と私は言った。そして所長は言った「それはよく存じております」。



フキノトウ



K.